

北区三ヶ日町

竹平尚裕さん

みかん農家

祖父の代から始めたみかん農業は僕で3代目。竹平家のみかんと三ヶ日みかんのブランドを背負って。



Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「ここ三ヶ日町で生まれ育ち、昔からみかん栽培を手伝うのが日常でしたが、高校の頃までは正直、家業を継ぐつもりはそれほどありませんでした。ひとつのきっかけは北海道の大学へ進学したことです。そこでは農家の後継ぎが多く、意欲的な友人たちからいろいろな刺激を受けました。卒業後はすぐには就農せず、自動車関係の会社に営業担当として3年間勤めました。そこでも色々な経験をさせていただきましたが、やはり自分には農業の道しかないと3年前に実家に戻る決心をしました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「やる気や効率が収入に直結するところだと思います。自分なりに、“効率”というのをいつも大切にしています。農業においてとても重要なことだと思っていて、営業の頃も意識していたことではありますが、そういった努力がちゃんと実を結ぶというか。年々自分が管理する分野が広がってきて、責任も増えてきていますが、そんなところもやりがいになっています。また、三ヶ日町農協の柑橘部では若い世代で勉強会を開いています。勉強というのは建前で、みんなで集まってワイワイやってる感じですが（笑）がんばっている同世代にはやっぱり刺激を受けますね。」

Q.「反対に、苦勞しているところはどんなところですか？」

A.「会社勤めの頃は体を使うことは少なかったのですが、就農した1年間はほんとに体がキツかったです。段取りが分からなくて余分な動きが多かったのもきつとあるんですよね。それから、今の収穫時期は毎日たくさんの切り子さん達に手伝ってもらっています。大勢なのでなかなか指示がいきわたらないこともあるのですが、なるべく丁寧に丁寧に伝えるようにしています。みなさん父の代から来ていただいているベテランの方々と、経験も豊富です。自分が認められないといけない、それが今は大切だと思っています。」

Q.「ズバリ、竹平さんにとって農業とは？」

A.「祖父の代から始めたみかん農業は僕で3代目になります。竹平家のみかんを背負っているという使命感が、ひとつかもしれません。また、産地として全国に誇る三ヶ日みかんのブランドを維持していかなければというプレッシャーも感じています。食べてくれるお客さんの評価は常に気になりますし、少しでも出来が悪いみかんは誰にもあげたくない。ただ、そんなプレッシャーが、僕なりに充実している部分かもしれません。」

Q.「最後に、作られている農産物のPRを！」

A.「糖度と酸のバランスが絶妙な三ヶ日みかんのおいしさは、この土や地形、気候ならではのものです。他の産地のみかんもおいしいけれど、三ヶ日みかんが一番おいしい！と胸を張って言えます。ぜひたくさん食べてください！」



三ヶ日みかん

三ヶ日地域で生産される青島を主力品種とした「三ヶ日みかん」は、コクのある味わいのみかんとして全国ブランドとなっている。高い糖度と独特の食味があり、大果系で扁平な形が特徴。



浜北区宮口

廣瀬明良さん

いちご農家

自分自身の創意工夫によって、どうやって安定した農業経営につなげていくのか。日々挑戦しているところです。



Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「僕の家は元々専業農家で自分は長男ですので、いずれ農業を継ぐということとはごく自然なことでした。磐田市にある県立農林大学校に進学して農業技術を学び、その後農業資材を販売する民間企業で働いた後、4年前に実家に戻り妻とともに就農しました。栽培品目にイチゴを選んだ理由は、農林大学校時代の先生からの薦めもあったことからです。農林大学校ではイチゴの研究も大変盛んでしたしね。将来性もあると感じて決めました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「イチゴは特にそうだと思いますが、自分が手を掛けた分だけ応えてくれます。うちは直売が専門ですので、品質がストレートに売り上げに直結しますし、お客様の評価もシビアです。着果数を絞り一つ一つの品質を高める生産方式をとっているのですが、そんな中で、「廣瀬さんのものでないと」と買ってくれるお客様が来てくれるのが何よりうれしい瞬間ですね。」

Q.「反対に、苦勞しているところはどんなところですか？」

A.「イチゴはクリスマスや年末に需要がかなり集中するので、その時期はすごく大変です。今年は特に苗が十分に確保できないこともあり苦勞しました。また、施設園芸のため農業資材のコストも大きく、経営のやりくりは苦勞するところ

です。僕は資材を扱う会社に勤めていたこともあり、自分で大概のものは作ることができるので、そういった工夫で農業経営に努力しているところです。実は、このハウスも自分で作ったものなんですよ。」

Q. 「ズバリ、廣瀬さんにとって農業とは？」

A. 『自分への挑戦』ではないかと思います。農産物の価格もなかなか上がらない中で、農業を継ぎ、家族を養っていくという責任を負っています。例えば、このイチゴを植えている高設栽培床も自分で作ったものですが、いちばん作業がしやすく効率の良い高さになっているんです。そういった自分自身の様々な創意工夫によって、どうやって安定した経営につなげていくのか、日々挑戦しているところです。」

Q. 「最後に、作られている農産物のPRを！」

A. 「うちのイチゴは味にこだわり、着果数を絞って品質を高める栽培をしています。甘くておいしいイチゴをぜひ味わってください。浜北のイチゴは廣瀬のイチゴと言われるように、がんばっていきたいです。」



章姫（あきひめ）

「章姫」は「久能早生」と「女峰」を交配し、静岡県の萩原章弘氏が育成したもので、1992年に品種登録された。長めの円錐形で、果皮が柔らかい。酸味が少なく、ジューシーな甘みが特長。



北区三ヶ日町・三方原町

長谷川乾さん・実香さん

有機野菜農家

自分たちにとって農業は地球と調和した生活の実践。
異業種からのチャレンジで、ひとつひとつ夢を実現していきたい。



Q.「どんな農産物を作っていますか？」

A.「馬鈴薯などの芋類、ナスなどの果菜類、タマネギなどのねぎ類といった有機野菜を、少量多品目に栽培しています。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「以前は東京の大手ITベンチャー企業で10年以上勤めていました。勤めている期間のうち2年間、世界一周の放浪旅を経験したのですが、その中で世界の現実を目の当たりにし、できるだけ地球と調和した生活が必要だと思ふようになりました。また、旅の後に出会い結婚した妻が化学物質過敏症だったこともあり、食べる物の安全性をより求めるようになりました。創業期から勤め愛社精神も非常に強かった自分ですが、そうした様々な環境や考え方の変化がきっかけとなって、農業の世界に入ることを決めました。」

Q.「農業の魅力ややりがいを感じる場所はどんなところですか？」

A.「自分達にとって、農業は地球と調和した生活の実践です。農業に興味のある方を募り、一緒になっていろいろな活動もしていますが、そういう仲間たちの協力を得ながら充実した生活を送っています。また、夫婦で共に働いていられる毎日はずごく幸せなことです。それから、組織・会社の中では人が人を評価することが常です。もちろんそれは普通のことであるのですが、農業の場合は自然が自分を評価する。うまく

いけば、それは自然の循環に合っていたということであるし、逆にうまくいかなかったということは、合っていなかったということ。自分の場合は心から納得できます。それも農業の醍醐味だと感じています。」

Q. 「反対に、苦勞した又は苦勞しているところはどんなところですか？」

A. 「栽培した野菜のセットを消費者の方に直接販売していますが、例えば同じ夏野菜でも種類によって生育期間や採れるペースがばらばらなので、ご要望に応じた野菜を同時にそろえることが難しく、苦勞をしているところです。自分は異業種からのチャレンジであり、草取り、マルチ張り、など基本的な畑仕事の全てが慣れない作業でしたが、未知の世界に踏み込んでチャレンジしている毎日がドキドキワクワクしています。就農してまだまだ経験が浅く、これから先もっとたくさんの苦勞があると思いますが、目標に向かって技術を磨いていきたいと思っています。」

Q. 「これから先の夢は？」

A. 「今がまさに夢の実践中でもあるのですが、まずは目先の夢として、まったくの素人の自分たちが有機栽培農家として生計を立てていけるようになること。またその先の夢として、自分の経験をもとに新規就農にチャレンジする若者を応援すること、日本だけでなく世界をフィールドに農業の指導していけるようになることです。これからもうちに集まってくれる仲間たちとともに、自分たちが持つ希望に向かっていき、その過程も楽しんでいきたいと思っています。」



環境保全型農業

農業の持つ物質循環機能を生かし、生産性との調和に留意しつつ、土づくり等を通じて、化学肥料、農薬の使用等による環境負荷の軽減に配慮した持続的な農業。



